

題目 何が日本人の高流動的行動を阻むのか？－青年期の経験に関するインタビュー調査－

氏名 小竹理丘

指導教員 結城雅樹

本研究は人間の行動を社会環境に対応するためのものとして説明する社会生態学的アプローチを用い、社会環境として特に「どのくらい自由に関係を形成したり組み替えたりできるか」を示す関係流動性に着目する。先行研究において日本は関係流動性の低い国だとされてきたが、インターネット普及率や産業形態を考えると日本は以前と比べ開かれた社会になっていると考えられる。しかし、多くの日本人は積極的に初対面の人に話しかけるといった高流動的行動をとっていない。では、なぜ日本人は高流動的行動をとらないのだろうか。本研究では、現在の関係流動性だけでなく、青年期の経験が、人々が高流動的行動をとるかどうかに影響を与えるという仮説を立てた。つまり、現在の日本で高流動的行動をとっている人は、高流動的行動をとるようになったきっかけとなる経験が青年期にあり、高流動的行動をとっていない人はそのようなきっかけがなかったと考えられる。また、高流動的行動をとっていない人は、高流動的行動を阻むような経験が青年期にあり、高流動的行動をとっている人はそのような経験がなかったという可能性も考えられる。本研究は、現在の高流動的行動に影響を与えるような青年期の経験について探索的に調査したものである。調査方法は個人の体験や感覚を詳細に記録でき、探索的な調査に向けた口頭によるインタビューを用いた。本調査から、1. 高流動的行動をとるきっかけとなる経験は3つに分類できる。2. 高流動的行動をとるスキルを獲得するためには初対面の人と話す場面をどれだけ経験しているかということが重要である。3. あるきっかけを経験し、初対面の人と話す場面が増え、高流動的行動をとるためのスキルを獲得することで、高流動的行動をとるようになる。4. 高流動的行動をとるようになるまでの過程を阻むものとして3つの可能性がある。ということが考えられる。3つの可能性とは1. 高流動的行動のきっかけとなりうる経験に適応できなかった場合、2. 高流動的行動をとるためのスキルを獲得するには、初対面の人と話す場面が足りなかった場合、3. 高流動的行動をとるスキルはあるが高流動的行動をとる必要性がないと考えている場合である。